

IG I³ 1032 再考

Some notes on IG I³ 1032 and the crews of Athenian triremes in the fifth century BC.

岡田 泰介

Taisuke Okada

はじめに

Athenian Naval Catalogue と通称される IG I³ 1032 (以下、ANC と略記) は、アクロポリスとその周辺で発見された 11 個の断片として現存している碑文である。断片を収集した Laing (1966) は、それらの断片をもとに、8 隻の三段櫓船の乗員の完全な名簿を記録していたと思われる碑文を復元した。彼の復元は Lewis (1991) によって原則として支持され、Graham (1998) も一部を除き Laing の復元案の正しさをみとめた。Laing の復元によれば、現存する断片には 4 隻の船の乗員名簿の一部が残っている。碑文の配列順に、この 4 隻を以下 T1~T4 と略記する。

乗員名簿は、船ごとに地位、船上での役割、身分を基準として配列されている。それぞれの船の名簿の冒頭には二人のトリエラルコスが置かれ、次に 10 名の *epibatai*、操船員 (*hypēresia*)、漕手の順で続く。漕手は市民 (*nautai astoi*)、外国人 (*xenoi*)、奴隸 (*therapontes*) の三つのカテゴリに分けられており、市民は *dēmotikon*、奴隸は奴隸主と思われる属格の人名によって識別される。外国人のうち在留外人は登録区、それ以外の外国人は *ethnikon* によって区別されている。特徴的なのは外国人と奴隸からなる非市民身分の漕手の比率の高さで、船によってばらつきはあるものの、漕手全体のおよそ 20~60% を占めている。

ANCは刊行されて以来議論的となり、非市民が乗員中に占める割合の大ききゆえに、何らかの例外的な状況を反映したものとする解釈も多かった。かつて筆者は、1) アルギヌサイ・アイゴスポタモイの戦いとの関係、2) 奴隷乗員、3) *epibatai*、4) 乗員の調達方法という四つの論点から検討を行い、ANCにみられる乗員構成を5世紀末のアテナイ海軍の常態とする仮説を提示した。以下本稿では、旧稿の発表以降現在までの研究成果をふまえつつ、主要な論点に関して再検討を試みる¹。

アルギヌサイ・アイゴスポタモイの戦いとの関係

ANCは、従来しばしば、アルギヌサイ・アイゴスポタモイの戦いに際して大量の奴隷が漕手として投入された状況を反映した史料とみなされてきた。この方向での解釈は、1) 戦没者記念碑説、2) 顕彰碑文説、の二つにまとめられる。

まず戦没者名簿説に対しては、Graham (1992. 264-265) が指摘するように、いくつかの有力な反証が挙げられる。第一に、かりにANCが8隻の軍船の乗員全員を記録しているとすれば（現存断片から判断してその可能性は高いが）、それらの乗員全員が戦死者であるとは考えにくい。また、シュントリエラルキアのトリエラルコス名が二人とも挙げられていることも、戦没者名簿としては不自然である。なぜなら、実際に乗船したトリエラルコスは一人だからである。第二に、現在までに発見されている断片すべてが、戦没者記念碑が通常立てられるケラメイコスではなく、アクロポリスとその周辺でみつかっている。第三に、名簿が部族ごとに配列される戦没者記念碑と異なり、ANCでは船ごとに配列されている。第四に、T4のトリエラルコスの一人であるトリア区のモリュコス (L.409; *LGP* II 3) は、4世紀初頭にアクロポリスに奉納碑文 (*IG* II² 4882) を建立した人物と同一人の可能性がある²。同一人物であれば、彼は5世紀末に戦死してはいないことになる。このように、戦没者記念碑説には否定的な証拠

¹ 岡田泰介 1998. 本稿は、2017年8月28日から9月1日にかけてウィーン大学で開催された第15回国際ギリシア・ラテン碑文学会 (XV. Internationalen Kongresses für Griechische und Lateinische Epigraphik) において行った口頭報告に加筆修正を加えたものである。

² Meritt 1927.469-470; Laing 1966.82.

が多く、無理があるといわざるを得ない³。Funke (1983.169 et n.83) が試みたようにアルギヌサイ・アイゴスポタモイと切り離して考えても、やはり ANC を戦没者記念碑とみなすことはむずかしい。

次に顕彰碑文説。その先駆けは、ANC をアルギヌサイ・アイゴスポタモイで戦った奴隷たちを称えた記念碑とした Köhler (1883.179-180) である。Köhler の仮説は Sundwall (1915.135-136) によって否定されたが、顕彰碑文説自体は、その後、コノンとともにアイゴスポタモイから脱出した 8 隻の船 (Xen. *Hell.* 2.1.28) の乗員を顕彰したものであるという Laing (1966.107-117) と Welwei (1975.84-86) の仮説として復活した⁴。しかし、二人の仮説に対してはいくつかの反証を挙げることができる。第一に、Graham (1992.265) も指摘しているように、敗戦から逃げ帰った乗員たちが、とりわけアルギヌサイ海戦に関する将軍裁判前後のアテナイ社会の非寛容な雰囲気なかで、はたして称えられたらうかという疑問が拭えない。第二に、ANC の字体はエレクトイオン建設関係碑文 (408/7) および同時期 (410/9) の別の碑文 (IG I³ 101) の字体とよく似ており、クニドス海戦後への年代指定には難がある⁵。第三に、乗員の顔ぶれが 10 年ものあいだ変わらなかったとは考えにくい⁶。第四に、アイゴスポタモイから脱出した船は必ずしも 8 隻だけではなかった可能性がある⁷。

多数の奴隷乗員の存在を根拠とするアルギヌサイ・アイゴスポタモイとの関連づけを別にすると、ANC の年代指定には四つの手がかりがある。第一に、字体は、それ自体の特徴および上述のエレクトイオン建設関係碑文と IG I³ 101 との類似によって、5 世紀末を指し示す⁸。第二に、二人のトリエラルコスの存在は、Graham (1992.265 et n.34) が注意を促しているように、シュントリエラルキアの年代的下限 (*terminus ante quem*) を示すだけで、ANC そのもの

³ cf. Bakewell 2008. 154-155.

⁴ ただし、両者の見解には違いもあり、碑文の建立を 394 年のクニドスの海戦後に置く Laing に対して、Welwei はアイゴスポタモイの敗戦直後とする。

⁵ Lewis 1979. 186 n.7.

⁶ cf. Funke 1983. 166-167.

⁷ 8 隻 (Plut. *Alc.* 37.4, Lys. 11.8; Justin. 5.6.10)、9 隻 (Xen. *Hell.* 2.1.28)、10 隻 (Diod. Sic. 13.106.6; Paus. 3.11.5)、12 隻 (Lys. 21.11) その他の史料については Krentz 1989. 177.

⁸ 字体そのものは 5 世紀末から 4 世紀初頭の時間幅を示す。Laing 1966.94 et n.1.

の年代指定にはあまり役立たない⁹。第三に、乗員のなかにはエレクテイス族出身者が多く、またストロンピキデスという珍しい名を持つ奴隷乗員がみられる。Graham (1998.103-108) は、これら二つの手がかりをもとに、ANC は 412 年にエレクテイス族出身の将軍ストロンピキデスの指揮のもとサモスへ向かった 8 隻の船の乗員 (Thuc.8.15.1-16.1) を記念して建立されたと推定する¹⁰。

年代指定のための第四の、そしてもっとも重要と思われる手がかりは、*ethnikon* によって区別された外国—アフュトス、ペパレトス、キュントス、ヘスティアイア、ナクソス、キオス、サモトラケ、ケオス、ロドス、キモロス—出身の乗員の存在である。彼らの多くは T1 (II.72-99) に乗り組んでいる。外国人乗員は必ずしも同盟関係にある国だけから募集されたわけではないという意見もあるが¹¹、Jordan (1975.71-72) は彼らの存在を各自の出身国とアテナイとの同盟関係の指標とみなす。Jordan の見解はいくつかの証拠によって傍証される。第一に、トゥキュディデスは、ペリクレスの口を借りて、敵国に雇われた船員は祖国から追放されると述べている (Thuc.1.143.2)。第二に、アテナイ人はキオスの離反を知るや、ただちに自軍内のキオス人全員を逮捕・拘束した (Thuc.8.15.2)¹²。第三に、外国人乗員の出身国はキモロス以外すべてデロス同盟草創期以来の加盟国である。Jordan (1975.71-72 et 71 n.45) は、この事実を当時なお同盟が健在であった証左とみる。

Funke (1983.168 et n.80) は Jordan の見解を批判し、ANC をロドス島の三つのポリス—リンドス、イアリュソス、カミロス—がシュノイクスモスによってポリス・ロドスを形成した 408 年以降 (ただし 5 世紀末以前) に年代づける。その根拠は、ANC に現れる二人の乗員 (II.93-94) が *RODI(OS)* という *ethnikon* を帯びていることである。しかし、Gabrielsen (2000.180-185) が指摘しているように、*Rhodioi/Rhodos* という *ethnikon* は、シュノイクスモス以前にも使

⁹ Pope (1935.22) は、シュントリエラルキアの導入年代を 411 年とする誤った認識にもとづき、ANC をアテナイによる同年のエレトリア遠征と関連づけた。

¹⁰ Harold Mattingly の示唆によるという。

¹¹ Sundwall 1915.137; Laing 1966.69-70; Graham 1992.265.

¹² キオスは離反後の 406 年、ロドスおよび他の同盟諸国とともにペロポネソス海軍に艦隊を提供した。Xen. *Hell.* 1.6.3.

われていた。トゥキュディデスのような文献史料だけでなく、ANC 以外の少なくとも二点の碑文でも用例が確認できる¹³。したがって、ANC にみられる二人の *Rhodioid* の存在は、この碑文を 408 年以降に年代づける根拠とはなり得ない¹⁴。つまり、同盟国人の乗員、とりわけキオス人とロドス人の存在は、ANC が両国の離反（413、412/411）以前の状況を反映していることを示すと考えてよい。

奴隷乗員

いうまでもなく、ANC が研究者たちの注目を集めた最大の理由は、多数の奴隷身分の乗員の存在である。上述のように、奴隷の名は奴隷主とみられる属格の人名を伴っている。奴隷主の名のほとんどは船の幹部乗員（トリエラルコス、*epibatai* など）の名と一致するが、自由人の漕手の名と一致する奴隷主名も 7 例ある。そのうち 3 名が市民、4 名は外国人と在留外人である。すべての幹部乗員の奴隷主とその奴隷の名は同じ船の名簿に現れるが、奴隷主名と一致する名を持つ自由人の漕手 7 人のうち奴隷と同じ船の名簿に現れるのは 2 名のみである¹⁵。

かつて、これらの奴隷は漕手ではなく船の幹部乗員の従者であるという仮説がとえられたが、この仮説は、Thuc.7.13.2 の解釈に関する Graham の重要な研究（1992, cf. 1998）によって最終的に否定されたといつてよい¹⁶。Graham（1992.258-259）は、シケリアのアテナイ艦隊から脱走した奴隷たちが軍船の乗組員を構成する正規の漕手であったことを論証した。さらに重要なことに、Graham（1992.260-263）は、漕手の奴隷主のなかに遠征に従軍していた自由人の漕手がいたことをもあきらかにした。

かくて、シケリア遠征当時のアテナイ海軍には多数の奴隷が正規の乗組員として従軍しており、そのなかには自由人の漕手が所有する奴隷がいたことがほ

¹³ IG^I 1454, l.30 (c.445-430); *IvO* 151 (Elis 464)

¹⁴ Gabrielsen 2000.200 n.18.

¹⁵ 自由人の乗員とその奴隷に関しては、Graham 1992.266 n.40, 1998.98-99. Graham (1998.109) は、奴隷主名と一致する名を持つ自由人の漕手のうち、少なくとも奴隷と同じ船の名簿に現れる 2 名は、実際に自分の奴隷と同じ船に乗っていたと考える。Herzogenrath-Amelung (2017.56) は、根拠は示さずに、奴隷を同伴した漕手はいなかったとする。

¹⁶ Sargent 1927.273-274, 276; Casson 1966.36-37; Garland 1988. 164, 166.

ば確実となった¹⁷。この仮説は、奴隷が奴隷主ともども漕座に就いていたという[Xen.] *Athe. pol.* 1.19の証言によって傍証される。以上の傍証にもとづき、ANCの奴隷乗員もまた、奴隷主を補助する役割を果たしていた者を除く大多数が漕手であったと推定できる。奴隷乗員の人数が従者としては多すぎることも、この推定を裏づける¹⁸。

ANCの奴隷乗員に関しては、もう一つ重要な問題がある。彼らの人数が、全員を自由人の乗員が同伴していた奴隷と考えるには多すぎるという問題である¹⁹。事実、奴隷主名と一致する名が自由人乗員のなかにみあたらないケースが少なくない。Hunt (2006.27)は、Laingの見解を継承しつつ、奴隷主名が自由人乗員の名簿にみあたらない奴隷は、船に乗っていない奴隷主が親族や友人の自由人乗員に預けたものと推測する²⁰。

この問題に関しては、エレクトイオン建設関係碑文(IGI³ 474-479)との比較が示唆に富む。字体からほぼ同時期の史料と思われるこの一連の碑文にはANCとの共通点が少なくなく、研究者の注意を引いてきた²¹。ここでは、職人たちが、自由人であると奴隷であると問わず、同種の仕事に従事し同一の賃金をうけとっている²²。注目すべきは、奴隷主と離れて働いているようにみえる

¹⁷ Welwei 1974.88-89; Jordan 1975.223; Graham 1992.258-259 et 258 n.4, 1998.109-110; Hunt 1998.98.

¹⁸ Morrison et al. (2000.113)は、船先長(*prōiratēs*)と舵手(*kybernētēs*)はそれぞれ5人の助手を擁していたとする。cf. Xen. *Anab.* 5.8.20; Graham 1998.101-102。また、トリエラルコスと*pentekontarchos*のような幹部乗員も助手を必要としたであろう。さらに、*epibatai*は通常奴隷を従えていた。船上でこうした補助的な役割を果たしていた奴隷は、乗員全体の10%程度を占めたと推測されている。Laing 1966.93; Hunt 1998.97.

¹⁹ Laing 1966.136-137. Graham (1998.101-102)は見解を保留している。

²⁰ その可能性を最初に示唆したのはPope (1935.22 n.32)である。Laing (1966.138-139)は、奴隷ヘラクレイデスの奴隷主フィロニキデス(1.270)を、同系統の名を持つ弓手(*toxotēs*)フィロニコス(1.169)の親族と推測している。

²¹ エレクトイオン建設には、市民、在留外人、奴隷の三つの身分の職人が携わっていた。ANCと同様、市民は*dēmotikon*、在留外人は登録区、奴隷は奴隷主名によって区別されている。Randall 1953.200; Jordan 1975.261; Graham 1998.107-108; Hunt 1998.99, 2006.27-28. cf. 伊藤貞夫 1981.36-37.

²² Loomis 1998.108 et n.12. Feyel (2006.323)は、奴隷身分の職人がすべて大工か石工であることを根拠に、自由人と奴隷の間には分業があり、奴隷には‘*travail servile*’が割り当てられていたと主張する。しかし、Randall (1953.204)が指摘しているように、奴隷職人が大工と石工に集中しているのは、仕事の需要の多い大工と石工だけが奴隷を購入して訓練する資力を持っていたことの表れにすぎない。碑文から判断する限り、自由人と奴隷との間に職掌や賃金の違いがあったようには思われない。

奴隷がいることである²³。自分の奴隷主ではない自由人の職人とともに働いている者もいる²⁴。これら奴隷主と離れて働く奴隷たちのなかには、奴隷主によって仕事仲間や親族の職人に賃貸されていた者がいたと思われる²⁵。また、奴隷主から独立して働く奴隷がいた可能性もある。このように奴隷主の家計から独立した生計を営み、奴隷主に収入の一部を *apophora* として支払う奴隷は *douloi misthophorountes* とよばれ、アテナイではよく知られていた²⁶。

商船の乗組員はしばしば、ときには船長も、船主が所有する *douloi misthophorountes* であった²⁷。そして、[Xen.] *Athen. pol.* 1.20 は、舵手は商船や客船で修行したあと軍船に移ったと伝える。これは、商船の奴隷乗員が軍船乗員の供給源の一つとなっていたことを傍証する。また、Dem.4.36-37 は、おそらく *douloi misthophorountes* と同種の「離れて暮らす (*chōris oikountes*)」奴隷が軍船乗員として動員されたことをほのめかしている²⁸。[Xen.] *Athen. pol.* 1.11 も、曖昧ながら同様の事実を示唆しているように思われる²⁹。以上の傍証にもとづき、ANC の奴隷乗員のうち奴隷主の名が自由人乗員の名簿にみら

²³ フィロクレスの奴隷クロイソス (IG^I 475, ll.67, 233, 255-256) とゲリュス (ll.254, 290)、ヘラクレイデスの奴隷 (l.234)、ドロモンの奴隷 (l.187)、アクシオペイテスの奴隷ケルドン (IG^I 476, ll.22, 88-89, 201, 237-238, 319) とソクレス (ll.90, 202-203, 239, 320)、ニコストラトスの奴隷オネシモス (ll.206-207, 243-244, 443)、グラウコスの奴隷アンティドトス (ll.210-211, 247) cf. Randall 1953.202-203; Feyel 2006.33-35, 39, 41, 45, 49.

²⁴ たとえば、メリテ区のアクシオペイテスの奴隷ケルドンとソクレスは、つねにアロパケ区のシミアスとその奴隷たちとともに働いている。

²⁵ Randall (1953.204) は、職人が未熟練奴隷を安く買って仕事を仕込み、高い賃貸料を取って貸し出していたと推測する。事実、Dem.27.20 は奴隷職人の賃貸に言及している。

²⁶ 関係史料の多くは 4 世紀のものであるが、この種の奴隷は 5 世紀にも存在していたと思われる。4 世紀の史料は、Aesch.1.97; Isae.8.35; Theophr. *Char.*30.15。5 世紀の史料としては、[Xen.] *Athen. pol.*1.17 が挙げられる。Kalinka 1913. 131-132, 162; Randall 1953. 206; Westermann 1955. 12; Jones 1956. 188.

²⁷ Dem.33.8-9; 34.10. Amit 1965.54.

²⁸ Kolbe 1901.45 et n.249; Westermann 1955.12; Jones 1965. 188; Welwei 1974. 102 n.144. *chōris oikountes* は奴隷ではなく解放奴隷だという意見もある。Sargent 1927. 267 n.6. その根拠は、Dem.47.72 および Harp. (Suda; Phot.), s.v.tous *chōris oikountes* という二つの史料である。しかし、これらの史料は解放奴隷が奴隷主とは別に暮らしていたことを伝えているにすぎず、独立会計を営む奴隷の存在に対する反証にはならない。

²⁹ テクストの毀れが疑われ、解釈がむずかしい。何人かの論者 (Kalinka 1913.129-130; Sargent 1927.272 n.3; Gelzer 1937.117; Amit 1965.32; Welwei 1974.91) が主張するように一部の奴隷が軍港の雑用といった非軍事的な業務に従事していたにせよ、そのことは軍船に搭乗した奴隷がいたことを否定する根拠とはならない。Jordan 1975. 261-262; Graham 1992. 262-263.

れない者たちは、乗船していない奴隷主によって自由人乗員に賃貸された奴隷か、*douloi misthophorountes* のような自立した生計を営む奴隷であったと推測することができる。

この推測が正しいとすれば、自分の奴隷を海軍に貸し出した奴隷主たちの動機が問題となる。エレクテイオン建設関係碑文の奴隷職人たちは自由人と同一の賃金をうけとっていた。同じことが海軍の奴隷乗員にも該当したと想定しても不自然ではない³⁰。トゥキュディデス(3.17.4)は、ポテイダイア攻囲戦(428)の期間中、重装歩兵が奴隷の従者とともに2ドラクマをうけとっていたと伝えており、軍船乗員にも同じ原則が適用された可能性がある³¹。

奴隷乗員が自由人と同等の賃金を得ていたとすれば、奴隷主たちの動機を以下のように推測することができる。第一に、奴隷主は、奴隷が得る収入の一部を賃貸料や([Xen.] *Athen. pol.* 1.11 が示唆するように) *apophora* として得ることができた。第二に、季節的な海軍勤務は、農民や職人である奴隷主にとって、自分の奴隷を有効に稼働させる手段となった。奴隷は、賃金労働者と違って閑散期にレイオフすることができなかつたからである。第三に、鉱山業の奴隷賃貸契約(Xen. *Vect.* 4.14)からの類推がゆるされるならば、契約期間中奴隷を扶養し、負傷、死亡、逃亡などによって生じた損害を補償するのは、借主側の義務であった。奴隷主にリスクはなかつたのである³²。ちなみに、奴隷にとっても、賃金の一部を貯蓄し、数年後には自由を買い戻す見通しを立てられる海軍勤務は悪い話ではなかつたであろう³³。

³⁰ Morrison et al. 2000.108; Bakewell 2008.153 et n.70.

³¹ トウキュディデスはこの箇所で「艦隊は同一の賃金をうけとっていた (*nées...ton auton misthon epheron*)」と述べている。Pritchett (1971.16) は、海軍では自由人だけが賃金をうけとったことを当然視しているようである。

³² Jones 1956.189; Gauthier 1976.138-139. 奴隷主がリスクを嫌つたであろうことを軍船の奴隷乗員の存在を否定する根拠とする主張(Sargent 1927.273; Amit 1965.37)は成り立たない。Welwei (1974.103) と Gabrielsen (1994.108) は、海軍に奴隷を賃貸したのはおもに私人であったと考える。4世紀(306/5)には、在留外人エウクセニデスなる人物が自分の奴隷と思われる12人の船員を提供した功績によって顕彰された例がある。IG II² 554.

³³ Hunt (2006.38 n.67) は、ペロポネソス戦争初期の漕手の賃金を6オボロス、うち3オボロスを奴隷の生活費と仮定して、次のようなシナリオを描く。残り3オボロスのうち2オボロスを *apophora*、1オボロスを奴隷の取り分とした場合、年100日間の従軍によって100オボロスを貯金できる。平均的な奴隷価格を750オボロスとすると、奴隷は7年半で自由を買い戻すことができる。

Hunt (1998.87-95; 2006.30-31) によれば、奴隷の海軍への動員そのものは例外的なことではなかった。アルギヌサイ・アイゴスポタモイの戦いの際に例外的だったのは、従軍した奴隷を解放したばかりか、市民権をも付与したことであった。Welwei (1974.95-96) と Graham (1992.267) もこの見解を支持する。したがって、ANC に多数の奴隷乗員が現れること自体は、この史料をアルギヌサイ・アイゴスポタモイの戦いと関連づける根拠とはならない。さらに Hunt (1998.98-99) は、アテナイ以外の主要な海軍国 (コリントス、ケルキュラ、シラクサ、キオス) がいずれも奴隷乗員を使用していた事実を自説の傍証としている。

epibatai

ANC の名簿のなかで *epibatai* がつねにトリエラルコスに次ぐ位置に配列されている事実は、彼らが船内でトリエラルコスに次ぐ地位にあったことを示唆する。また、*epibatai* が少なくとも 1 名の奴隷を連れていることも、彼らの社会的地位の高さを示唆する³⁴。*epibatai* のこのような「エリート」としてのイメージは、*epibatai* が通常 *thētes* からなっていたという有力な仮説と矛盾するように見える³⁵。この仮説の根拠とされるのは、トゥキュディデスの二つの記事である。トゥキュディデス (6.43.1) は、シケリア遠征に従軍したアテナイの重装歩兵を、名簿 (*katalogos*) から徴兵された 1500 人と *thētes* の *epibatai* 700 人とに区別している。彼はまた別の箇所 (8.24.2) で、412 年にレスボスへ派遣された艦隊に名簿から徴兵された重装歩兵が *epibatai* として乗船していたと伝えている。

³⁴ Laing 1966.137-138; Herzogenrath-Amelung 2017.55-57. *epibatai* の一人ヒッポダマス (1.284) は、459 年の同名の将軍の孫と推定されている。Laing 1966. 76-79; Osborne-Byrne 1994. 237.

³⁵ *epibatai*=*thētes* 説は、Busolt 1926.575 et n.1, 1206; Körte 1932.1030; Laing 1966.137 n.23; Dover (*HCT* IV) 310; Andrewes (*HCT* V) 56; de Ste. Croix 2004.21; van Wees 2001.59, 2004.210, 308 n.40, 2006.371; Hornblower 2008.815-816.

*epibatai*が *thētes* からなっていたという仮説には、上述の ANC に関する知見を別にしても、少なからぬ反証が挙げられる³⁶。たとえば、ヘロドトス (Hdt.8.83) によれば、サラミス海戦前夜、テミストクレスはアテナイ艦隊の *epibatai* を招集して激励した。失敗に終わったデモステネスのアイトリア遠征 (426) の際に戦死した 120 名の *epibatai* を、トゥキュディデスは「最良の人々 (3.98.4; cf. 95.2)」と表現している³⁷。さらに *epibatai* は、シケリア遠征軍の出陣に際してアルコンたちとともに灌奠を行った (Thuc.6.32.1)³⁸。名門の出身であるアンドキデスが兵役忌避を非難された際、彼が果たすべきものと観念された義務として、騎兵や重装歩兵とならんで *epibatēs* としての兵役が挙げられている (Lys. 6.46)³⁹。400 年ごろに戦死したデメトリオスの子のデモクレイデスの墓碑浮彫には、盾 (*hoplon*) とコリントス式ヘルメットを傍らに置いて軍船の舳先に座す人物の姿が表現されている。彼が *epibatēs* であったとすれば、墓碑の質の高さはその高い社会的地位を示唆する⁴⁰。

アテナイ以外の国々でも *epibatai* は社会的地位の高い人々であった。イオニア叛乱末期、ラデの海戦 (494) で勇敢に戦ったキオスの *epibatai* をヘロドトス (Hdt.6.15) は「えり抜きの人々 (*andres logades*)」と表現している。トゥキュディデス (1.55.1) は、シュボタの海戦 (433) でコリントス軍の捕虜になった

³⁶ Jordan 1975.195-203; Pritchard 2010.24 n.139; Herzogenrath-Amelung 2017. 49-57.

³⁷ Gabrielsen 2002b, 211; Herzogenrath-Amelung 2017.54-55. Gomme (*HCT* II 407-408) は *epibatai*= *thētes* 説に固執するが、Andrewes (*HCT* V.56) 慎重な姿勢をとる。Hornblower (1991.514) は困惑し、Morrison et al. (2000.110) はこの箇所を *epibatai* を 'physically fit and elite force' とする。なお、プラトン (*Leg.*706d1) もまた *epibatai* を「市民の最良の部分 (*to tōn politōn beltiston meros*)」と表現している。cf. Herzogenrath-Amelung 2017.53. 栗原 (2017. 426-427) は、これらの言説を、重装歩兵を市民戦士の理想とするイデオロギーの表れであり、*epibatai* の実態 (たとえ彼らが武装自弁能力を持たない *thētes* であろうと) とは無関係と考える。しかし、プラトンは上掲箇所に先だって (*Leg.*706b7-d1) *epibatai* を重装歩兵の理想型から逸脱したものとみる観念があったことを示唆している。

³⁸ Morrison et al. 2000.110. Dover (*HCT* IV.296) は、この場面で *thētes* が灌奠を行うはずがないという根拠のもとに、当該の *epibatai* を 'representatives of the troop on board' と表現している。

³⁹ Andrewes *HCT* V.56; Jordan 1975.198; Herzogenrath-Amelung 2017.54.

⁴⁰ デモクレイデスを *epibatēs* とみなすのは、Jordan 1975.198; Strauss 2000.262-264 et 263 fig.1; 岡田 2015.20; Herzogenrath-Amelung 2017.46-47. Stupperich (1996.97) は、海軍に関する墓碑表象の欠如を根拠に、重装歩兵としてのデモクレイデスの表象を被葬者の理想化ととらえているらしい。そのような解釈の可能性はあろう。栗原 (2017.426-427) は、船と武器の組み合わせによってデモクレイデスを *epibatēs* とみなすことはできないとするが、代わるべき解釈は示していない。

ケルキュラの市民を「第一人者たち (*prōtoi*)」とよんでいる。ケルキュラの有力者とみられる彼らは、漕手ではなく *epibatai* であろう。シラクサの将軍ヘルモクラテスは、重要な決断に際しては麾下のトリエラルコスと舵手とともに *epibatai* に諮ったという (Xen. *Hell.* 1.1.28)⁴¹。アリストテレス (Arist. *Pol.* 1327b6-10) は、軍船を支配するのは *epibatikon* であると述べている⁴²。

epibatai の社会的地位の高さを示唆する以上の証拠を考慮するならば、5 世紀のアテナイにおいて *epibatai* が *thētes* のみで構成されていたという仮説は支持できない。*thētes* だけでなく他の等級 (*telē*) の市民もまた *epibatai* として従軍していたと考えてよかろう⁴³。したがって、415 年に *epibatai* が *thētes* のみから集められたとすれば、それは例外的な措置であったと思われる⁴⁴。この推測は、トゥキュディデスが全編を通じてこの箇所だけで *thētes* という語を用いている事実によって傍証される。

このように考えると、*epibatai*=*thētes* の根拠とされたトゥキュディデスの二つの箇所 (Thuc. 6.43.1; 8.24.2) に関しても、異なった解釈が可能である。第一に、トゥキュディデス (6.43.1) が区別しているのは、*zeugitai* 以上の等級の重装歩兵と *thētes* の *epibatai* ではなく、名簿から徴兵された重装歩兵と志願兵の *epibatai* と解釈すべきである。いいかえれば、区別の基準は等級ではなく兵士の調達方法にあった。この解釈が正しければ、412 年にトゥキュディデス (8.24.2) が注目したのは、*thētes* ではなく *zeugitai* 以上の等級の重装歩兵が *epibatai* として徴兵されたことではなく、通常は志願者から募集されていた *epibatai* を徴兵したことだったと考えることができる。*epibatai* が志願制であったことは、艦隊の派遣に関する 430 年ごろの決議 (IG I³ 60) によっても裏づけられる。ここでは、各船に 5 人の志願兵 (*ethelontes*) の *epibatai* を搭

⁴¹ Krentz 1989.103.

⁴² Herzogenrath-Amelung 2017.53-54.

⁴³ *thētes* が *epibatai* となった可能性自体を否定するものではない。van Wees (2001) は、経済的地位を向上させた *thētes* が 5 世紀には重装歩兵のかなりの部分を占めるにいたっていたと推定する。そうだとすれば、裕福な *thētes* が *epibatai* として従軍したとしても不思議はないであろう。cf. Okada 2017.

⁴⁴ Jordan 1975.196-197; Pritchard 2010.24-25; Herzogenrath-Amelung 2017. 50-51.

乗させるよう指令がなされている (II.10, 15-16) ⁴⁵。

軍船乗員の調達方法

かつての通説的な仮説によれば、五十年期には徴兵によっていた軍船乗員の調達方法は、5世紀末から4世紀中ごろまでトリエラルコスによる募兵に変わったが、357年のペリアンドロス改革を境に徴兵が復活した⁴⁶。このやや図式的な仮説に対しては、その後さまざまな修正が試みられている。Hansen (1985.22-24)によれば、徴兵は4世紀だけでなく5世紀にも軍船乗員の一般的な調達方法であった (Dem.14.22-23; 50.6; *IG I³* 1127-1131; *SEG* 22.274) が、乗員がつねに徴兵されたわけではなく、乗員のすべてがつねに徴集兵によって占められていたわけでもなかった。宮地 (1987.7-11) は、5世紀には区民名簿をもとに部族とトリッテュスを単位として実施される徴兵制度が存在しており、トリエラルコスによる募兵は通常の調達方法というよりむしろ自発的な奉仕であったと主張する。一方、Gabrielsen (1994.107-108) は、効率の悪い徴兵は5世紀の大半と4世紀全般を通じて例外的であり、トリエラルコスによる募兵が常態であったとする。

ANCが建立された5世紀末に関しては、まれに徴兵が実施されたにせよ、軍船乗員は通常トリエラルコスによる募兵によって調達されていたことを裏づける証拠がある。決め手となる史料はThuc. 6.31.3である。この箇所でもウキュディデスは、軍船の動員に際して国家とトリエラルコスのそれぞれが果たした役割を伝えている。国家は、乗員の基本給と「空の船 (*naus kenas*)」および操船員 (*hypēresia*) を提供した。この事実は、「空の船」に乗員を充当するの

⁴⁵ この決議をメロス遠征 (416/5) と関連づける旧説は否定され、現在では貢租徴収のための艦隊派遣に関わるものとする解釈が広く支持されている。Meritt 1953.300-303; Eberhardt 1959.284-314; Seaman 1997.403-404。ただし、碑文の年代を430年代に置く Meritt (1953.301-302) に対して、Mattingly (1990.111-112) は425年の貢租再査定後とする。

⁴⁶ Armstrong 1949.34-95; Busolt 1926.574; Jameson 1963.398-399; Amit 1965.48。宮地 (1987.2-3) による学説史の整理を参照。

がトリエラルコスの役目であったことを示す⁴⁷。国家とトリエラルコスのこのような役割分担は、5世紀末の状況を伝える別の史料 (Isoc. 18.60; Lys. 21.10) によっても裏づけられる。これらの弁論においてトリエラルコスである弁者が自分たちの功績として強調しているのは、漕手を募ったことではなく、漕手に賃金を支払い、操船員を雇い入れたことである。漕手の調達はトリエラルコスの当然の役割と観念されていたことがうかがえる。

ANC そのものも、トリエラルコスによる募兵をうかがわせる。この碑文に記録された軍船乗員の構成に関して、多数の奴隷の存在とともに研究者たちの注目を集めたのは、エレクトイス族の存在感であった。とくに T3 では、市民身分の乗員の 60% 近くをエレクトイス族出身者が占めている⁴⁸。しかしながら、彼らは区民名簿にもとづいて動員された徴集兵とは考えにくい。なぜなら、ANC に残る 4 隻の船のなかで T3 のケースは例外的であり、市民の乗員名が比較的よく保存されている T1 と T2 の乗員は、八または九つの部族に属する区からばらばらに集められているからである。したがって、T3 のエレクトイス族の乗員は、この部族出身のトリエラルコスであるプロトマコスが、部族の人脈を使って集めた志願兵と考えるほうがよい。この船の 10 人の *epibatai* のうち 9 人がエレクトイス族出身者である事実も、この推測を傍証する。なぜなら、上述のように、*epibatai* は志願者から募られるのがつねだったからである⁴⁹。

⁴⁷ Kolbe 1901.34, 38; Busolt 1926.574 et n.1; Dover (*HCTIV*) 293-294. *naus kenas* を、艀装を欠いた船とみなす仮説は成り立たない。なぜなら、船の艀装はつねに国家が提供したからである。Boeckh 1857.708-709. また、*kenas* を周縁的な写本にみられる *kainas* に読みかえる Armstrong (1949.64-67) と宮地 (1987.10) の解釈も説得的とはいいがたい。なぜなら、*naus kenas* が乗員を欠いた船を意味することは、4 世紀の史料 (Dem.3.5; 4.43) によって裏づけられるからである。Pritchett (1974.87 n.151) は、*naus kenas* を 'ships comprising mercenary crews' と解釈している。空の船に出港後に雇船員を乗り込ませるということであろうか？

⁴⁸ Pope 1953.1048; Laing 1966.98; Graham 1998.107-108.

⁴⁹ Gomme (1933.49 n.2) と Armstrong (1949.45-46) も、ANC の 4 隻の船の乗員が部族単位で徴兵されたという可能性には懐疑的である。Bakewell (2008.152) は T3 の市民乗員と *epibatai* のみを徴集兵と想定する。たしかに、[Dem.]50.7 のケースにみるように、徴兵が行われた際にもトリエラルコスが乗員の一部を志願兵によって補充することはあり得たであろうが、ANC では志願兵とみられる乗員のほうが多く (T1、T2)、T3 の乗員のみを徴集兵とみなすのはむしろかしいように思われる。

この解釈は、比較的最近刊行されたばかりの碑文によっても傍証される⁵⁰。これは、5世紀末から4世紀初頭に年代づけられる碑文の断片で、1隻以上の三段櫓船の乗員名簿と考えられている。年代的にも形式上もANCとの類似性がみられるが、刊行者のBardani (2004.151)は、ANCの一部をなすものではなく別個の碑文と考えている。現存断片上には、*Erechtheidos*という見出しの下にトリエラルコスと10人の*epibatai*と3人の操船員 (*kybernētēs*、*keleustēs* または *prōiratēs*、*pentekontarchos*) の名簿が続いている。部族名と思われる見出しと、トリエラルコスと*epibatai*全員がエレクトイス族出身者である事実にもとづき、Bardani (2004.153-154)は、この船の乗員は部族を単位として組織されていたと推定する。彼の推定が正しければ、当該碑文は、軍船乗員もまた重装歩兵と同じく部族単位で動員されていたことを示す重要な史料ということになるであろう。しかし、この船の乗員がANCのT3の乗員と同様トリエラルコスによって部族の人脈を通じて募られた可能性もまた否定できない。なぜなら、舵手と舳先長(または甲板長)が外国人(アブデラ人とファセリス人)だからである。この事実は、乗組員のなかに志願兵がいたことをうかがわせる。また、名簿の見出しをなす *Erechtheidos* は、Bardani (2004.153 n.29)自身もその可能性をみとめているように、船名であったかもしれない⁵¹。

ANCに戻ると、乗員の構成が多様で規則性がみられない事実も、トリエラルコスによる募兵を示唆している。たとえば、T2では、ほかの船よりも自由人の乗員の比率が高く奴隷は少ない。また、T1の確認できる限りの外国人乗員 (*xenoi*) が同盟諸国の出身者であるのに対して、T4の外国人乗員は大半が在留外人である。乗員構成にみられるこのようなばらつきは、国家による一律の動員よりも、トリエラルコスによる社会的・人的ネットワークを駆使しての募集を思わせる。

⁵⁰ Bardani 2004.

⁵¹ Jordan (1975.164-166)は、部族名を冠した10隻の船が5世紀から4世紀にかけて存在していたと推測する。

ANC の史的 성격

以上四つの論点の検討によって、旧稿で示した仮説を再確認することができたと思われるが、なお本質的な疑問が残る。かりに ANC が 5 世紀末のアテナイ海軍の標準的な乗員構成を示しているとするれば、この碑文は誰が何のために作成したのかという疑問である。

まず注意すべきは、Bakewell (2008.157) の認識とは異なり、ANC は類例を欠く孤立した史料ではない可能性が高いことである。というのは、上に引用した新断片 (Bardini 2004) のほかにも、ANC ではなく ANC と類似した別の名簿の一部とみられる断片が現在までに少なくとも二点知られているからである⁵²。つまり、ANC に類した碑文が複数存在していた可能性がある。それは、この種の碑文の建立が、一過性の行為ではなく、あるていど慣習的に行われていたことを推測させる。

ANC の史料としての性格を考えるにあたっては、5 世紀のアテナイにおける軍事文書の管理に関する Bakewell の研究 (2007, 2008) が示唆に富む。将軍やトリエラルコスなどの軍事役人にとって、指揮下にある将兵の正確な記録を作成し更新しておくことは、疑り深い *dēmos* に対して説明責任を果たし、自分の身を守るためだけでなく、人員の効率的な管理のためにも有益であったにちがいない。軍事役人たちは、そうした文書を自己流の様式で作成したであろう。現存する 4 隻の乗員名簿にみられる様式のばらつきは、それが、規格化された様式を持つ公文書でなく、個々のトリエラルコスが作成し保管していた文書に由来することを示唆する。

Bakewell (2008.154) は、ANC を、何らかの実務目的ではなく記念のために製作された碑文と推定する。その根拠は、第一に、この碑文がアゴラやペライエウスではなくアクロポリスに立てられたと思われること。第二に、碑文

⁵² アクロポリスの北斜面で 1937 年に発見された断片 (EM12894) は、地質学的な特徴といくつかの字体が ANC とは異なっている。Laing 1966.94 n.1; Graham 1998.90. Stroud (1972.428) はこの断片の年代を 4 世紀初頭と推定した。同じく 1937 年に Tholos の南西で発見された断片 (Agora I 4784) は、地質学的特徴は ANC と類似しているが、ANC が白色大理石であるのに比べて青みがかった大理石である。Meritt 1960.54-55; Lewis' note in IG I³.

のレイアウトが必ずしも参照に適しているとはいえないことである。Laing の推定によれば、ANC は、高さ 8~9mm のイオニア式アルファベットで 2000 行以上に及び、高さ 2.15m、幅 1m の碑に 10 本のコラムに分けて刻まれていた。Bakewell の推定が正しければ、ANC は、トリエラルコスによって作成され白板やパピルスのような非恒久的な媒体上に保管されていた文書が、編纂・整理され、記念のため碑に刻まれたものと考えることができる。その過程は、年代的にも内容的にも ANC との共通点の多いエレクテイオン建設関係碑文に似ていたかもしれない。かつてトリエラルコスによって作成された私的文書であった名簿は、ひとたび碑に刻まれアクロポリスに奉納されるや神聖なものとなり、それによってトリエラルコスの *dēmos* に対する説明責任もまた保証された。碑文を実際に参照するかどうかは、あまり重要ではなかったのであろう。

結論

以上、*IG I³ 1302* をあらためて検討した結果は、旧稿の見直しを確認するものとなった。冒頭に挙げた四つの論点、およびこの碑文の成立過程に関する試論に鑑みて、*IG I³ 1302* が何らかの例外的な状況を反映していることを裏づける積極的な根拠は乏しいように思われる。*IG I³ 1302* は、5 世紀末のアテナイ海軍としては標準的な乗員構成を持つ 8 隻の軍船のトリエラルコスたちが、各自で作成・更新・保管していた文書を碑に刻み、記念のためにアクロポリスへ奉納したものではないであろうか。

参考文献

- Amit, M. (1965). *Athens and the Sea: A Study in Athenian Sea-power*. Bruxelles.
Armstrong, J. I. (1949). *The Trierarchy and the Tribal Organization of the Athenian Navy*. (Ph.D), Princeton.
Bakewell, G.W. (2007). Written lists of military personnel in Classical Athens. In C. Cooper (Ed.), *The Politics of Orality: Orality and Literacy in the Ancient World VII* (pp. 89-102). Leiden: Brill.

- Bakewell, G. W. (2008). Trierarchs' records and the Athenian naval catalogue (IG I³ 1032). In E. A. Mackay (Ed.), *Orality, Literacy, Memory in the Ancient Greek and Roman World* (pp. 144-162). Leiden: Brill.
- Bardani, V. N. (2004). Θραύσμα ναυτικού καταλόγου. In A. P. Matthaiou & G. E. Malouchou (Eds.), *Αντικαί Επιγραφαι. Πρακτικά Συμποσίου εις Μνήμην Adolf Wilhelm* (pp. 141-154). Athens: Greek Epigraphical Society.
- Boeckh, A. (1857). *The Public Economy of the Athenians* (A. Lamb, Trans.). Boston: Little, Brown and company.
- Broneer, O. (1933). Excavations on the north slope of the Acropolis in Athens 1931-1932. *Hesperia*, 2(3), 329-417.
- Busolt, G. (1926). *Griechische Staatskunde*. München: Beck.
- Casson, L. (1966). Galley slaves. *TAPhA*, 97, 35-44.
- De Ste. Croix, G. E. M. (2004). The Solonian census classes and the qualifications for cavalry and hoplite service. In D. Harvey, R. C. T. Parker, & P. J. Thonemann (Eds.), *Athenian Democratic Origins: And Other Essays* (pp. 1-72). Oxford & New York: Oxford University Pr.
- Eberhardt, W. (1959). Der Melierdialog und Die inschriften ATL A 9 (IG II2 63 +) und IG I2 97 +. *Historia*, 8(3), 284-314.
- Feyel, C. (2006). *Les artisans dans les sanctuaires grecs aux époques classique et hellénistique à travers la documentation financière en Grèce*. Athens: de Boccard.
- Funke, P. (1983). Konons Rückkehr nach Athen im Spiegel epigraphischer Zeugnisse. *ZPE*, 53, 149-189.
- Gabrielsen, V. (1994). *Financing the Athenian fleet: Public Taxation and Social Relations*. Baltimore: Johns Hopkins University Pr.
- Gabrielsen, V. (2000). The synoikized « polis » of Rhodes. In P. Flensted-Jensen, T. H. Nielsen, & L. Rubinstein (Eds.), *Polis & Politics: Studies in Ancient Greek History: Presented to Mogens Herman Hansen on His Sixtieth Birthday* (pp. 177-205). Copenhagen: Museum Tusculanum Pr.
- Gabrielsen, V. (2002). The impact of armed forces on governments and politics in Archaic and Classical Greek poleis: A response to Hans van Wees. In A. Chaniotis & P. Ducrey (Eds.), *Army and Power in the Ancient World* (pp. 83-98). Stuttgart: Steiner.
- Gabrielsen, V. (2002). Socio-economic classes and ancient Greek warfare. In K. Asanti (Ed.), *Ancient History Matters: Studies Presented to Jens Erik Skydsgaard on His Seventieth Birthday* (pp. 203-220). Roma: L'Erma di Bretschneider.
- Garlan, Y. (1988). *Slavery in Ancient Greece* (J. Lloyd, Trans.). Ithaca: Cornell Univ. Pr.
- Gauthier, P. (1976). *Un commentaire historique des Πόποι de Xénophon*. Genève: Droz.
- Gelzer, K. I. (1937). *Die Schrift vom Staate der Athener*. Hildesheim: Weidmann.
- Gomme, A. W. (1933). *The Population of Athens in the Fifth and Fourth Centuries B.C.* Oxford & Malden (Mass.): Blackwell.

- Gomme, A. W. (1959). *A Historical Commentary on Thucydides, I*. Oxford: Clarendon Pr. (HCT I)
- Gomme, A. W. (1956). *A Historical Commentary on Thucydides, II: Books II-III*. Oxford: Clarendon Pr. (HCT II)
- Gomme, A. W. (1956). *A Historical Commentary on Thucydides, III: Books IV-V 24*. Oxford: Clarendon Pr. (HCT III)
- Gomme, A. W., Andrewes, A., & Dover, K. J. (1970). *A Historical Commentary on Thucydides, IV: Book V 25-VII*. Oxford: Clarendon Pr. (HCT IV)
- Gomme, A. W., Andrewes, A., & Dover, K. J. (1981). *A Historical Commentary on Thucydides, V: Book VIII*. Oxford: Clarendon Pr. (HCT V)
- Graham, A. J. (1992). Thucydides 7.13.2 and the crews of Athenian triremes. *TAPhA*, 122, 257-270.
- Graham, A. J. (1998). Thucydides 7.13.2 and the crews of the Athenian triremes: An addendum. *TAPhA*, 128, 89-114.
- Hansen, M. H. (1985). *Demography and Democracy: The Number of Athenian Citizens in the Fourth Century B.C.* Herning (Denmark): Forl. Systime.
- Herzogenrath-Amelung, T. (2017). Naval hoplites: Social status and combat reality of Classical Greek *epibatai*. *Historia*, 66(1), 45-64.
- Hornblower, S. (1991). *A Commentary on Thucydides, I: Books I-III*. Oxford: Clarendon Pr.
- Hornblower, S. (2008). *A Commentary on Thucydides, III: Books 5.25-8.109*. Oxford & New York: Oxford University Pr.
- Hunt, P. (1998). *Slaves, Warfare, and Ideology in the Greek Historians*. Cambridge & New York: Cambridge University Pr.
- Hunt, P. (2006). Arming slaves and helots in Classical Greece. In C. L. Brown & P. D. Morgan (Eds.), *Arming Slaves: From Classical Times to the Modern Age* (pp. 14-39). New Haven (Conn.): Yale University Pr.
- Jameson, M. H. (1960). A decree of Themistokles from Troizen. *Hesperia*, 29(2), 198-223.
- Jameson, M. H. (1963). The provisions for mobilization in the decree of Themistokles. *Historia*, 12(4), 385-404.
- Jones, A. H. M. (1956). Slavery in the Ancient World. *The Economic History Review N.S.*, 9(2), 185-199.
- Jordan, B. (1975). *The Athenian Navy in the Classical Period: A Study of Athenian Naval Administration and Military Organization in the Fifth and Fourth Centuries B.C.* Berkeley: University of California Pr.
- Kalinka, E. (1913). *Die pseudoxenophontische "Athēnaiōn politeia" : Einleitung, Übersetzung, Erklärung Sammlung wissenschaftlicher Commentare*. Leipzig & Berlin: B.G.Teubner.
- Köhler, U. (1883). Aus den attischen Marineinschriften. *MDAI(A)*, 8, 165-180.
- Kolbe, G. (1901). *De Atheniensium re navali quaestiones selectae*. (Dissertation), Berolinensi.
- Körte, A. (1932). Eine Verlustliste aus der Schlacht bei den Arginusen? *Philologische Wochenschrift*, 52, cols.1027-1032.

- Krentz, P. (1989). *Hellenika, I-II.3.10*. Warminster: Aris & Phillips.
- Laing, D.R.Jr. (1966). *A new interpretation of the Athenian naval catalogue, IG II2, 1951*. (Ph.D), Cincinnati.
- Lewis, D. M., & Stroud, R. S. (1979). Athens Honors King Evagoras of Salamis. *Hesperia, 48*(2), 180-193.
- Loomis, W. T. (1998). *Wages, Welfare Costs, and Inflation in Classical Athens*. Ann Arbor (Mich.): University of Michigan Pr.
- Mattingly, H. B. (1990). Some fifth-century Attic epigraphic hands. *ZPE, 83*, 110-122.
- Meritt, B. D. (1927). An Athenian naval catalogue. *AJA, 31*(4), 462-470.
- Meritt, B. D. (1953). An Athenian decree. In G. E. Mylonas & D. Raymond (Eds.), *Studies Presented to David Moore Robinson on his Seventieth Birthday II* (pp. 298-303). Saint Louis Missouri: Washington University.
- Meritt, B. D. (1960). Greek Inscriptions. *Hesperia, 29*(1), 1-77.
- Morrison, J. S., Coates, J. F., & Rankov, N. B. (2000). *The Athenian Trireme: The History and Reconstruction of an Ancient Greek Warship* (2 ed.). Cambridge: Cambridge University Pr.
- Okada, T. (2017). Zeugitai and hoplites: A military dimension of the Solon's property classes revisited. *Japan Studies in Classical Antiquity, 3*, 17-37.
- Osborne, M. J., & Byrne, S. G. (Eds.). (1994). *A Lexicon of Greek Personal Names II, Attica*. Oxford: Clarendon Pr.
- Pope, H. M. (1935). *Non-Athenians in Attic Inscriptions*. New York: Cosmos.
- Pope, H. M. (1953). Erechtheus and the Erechtheids *Studies Presented to David Moore Robinson on his Seventieth Birthday II* (pp. 1044-1051). Saint Louis Missouri: Washington University.
- Pritchard, D. M. (2010). The symbiosis between democracy and war: The case of ancient Athens. In D. M. Pritchard (Ed.), *War, Democracy and Culture in Classical Athens* (pp. 1-62). Cambridge & New York: Cambridge University Pr.
- Pritchett, W. K. (1971). *The Greek State at War, I*. Berkeley: University of California Pr.
- Pritchett, W. K. (1974). *The Greek State at War, II*. Berkeley: University of California Pr.
- Randall, H. R. J. (1953). The Erechtheum workmen. *AJA, 57*(3), 199-210.
- Rosivach, V. J. (1985). Manning the Athenian fleet: 433-426 B.C. *AJAH, 10*, 41-66.
- Rosivach, V. J. (2002). The Requirements for the Solonic Classes in Aristotle, AP 7.4. *Hermes, 130*, 36-47.
- Sargent, R. L. (1927). The use of slaves by the Athenians in warfare. *CPh, 22*(3), 201-212, 264-279.
- Seaman, M. G. (1997). The Athenian expedition to Melos in 416 B.C. *Historia, 46*(4), 385-418.
- Strauss, B. S. (2000). Perspectives on the death of fifth-century Athenian seamen. In H. v. Wees (Ed.), *War and Violence in Ancient Greece* (pp. 261-283). Swansea: Classical Pr. of Wales.
- Stroud, R. S. (1972). Inscriptions from the North Slope of the Acropolis, II.

- Hesperia*, 41(4), 422-450.
- Stupperich, R. (1996). The iconography of Athenian state burials in the Classical period. In W. Coulson & O. Palagia (Eds.), *The Archaeology of Athens and Attica under the Democracy* (pp. 93-103). Oxford: Oxbow Books.
- Sundwall, J. (1915). Liste athenischer Marinebesatzungen. *AA*, 30, cols.124-137.
- Wees, H. v. (2001). The myth of the middle-class army: Military and social status in ancient Athens. In T. Bekker-Nielsen & L. Hannestad (Eds.), *War as A Cultural and Social Force: Essays on Warfare in Antiquity* (pp. 45-71). Copenhagen: C.A. Reitzels Forlag.
- Wees, H. v. (2004). *Greek Warfare: Myths and Realities*. London: Duckworth.
- Wees, H. v. (2006). Mass and elite in Solon's Athens: the property classes revisited. In J. H. Blok & A. P. M. H. Lardinois (Eds.), *Solon of Athens* (pp. 351-389). Leiden: Brill.
- Welwei, K. W. (1974). *Unfreie im antiken Kriegsdienst, I: Athen und Sparta*. Stuttgart: Steiner.
- Westermann, W. L. (1955). *The Slave Systems of Greek and Roman Antiquity*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- 伊藤貞夫 (1981) 「古典期アテネの手工業者」『古典期のポリス社会』(岩波書店) 36-67
[(1971) 『ヨーロッパ・キリスト教史』 第1巻 (中央出版社) 151-183]
- 岡田泰介 (2015) 「前五世紀アテナイの艦隊乗組員－IG.I³ 1302 (Athenian Naval Catalogue) の分析を中心に－」『史学雑誌』 124(12), 1-36.
- 栗原麻子 (2017) 「書評：岡田泰介〈前5世紀アテナイの艦隊乗組員 IG I³ 1032 (Athenian Naval Catalogue) の分析を中心に〉」『史学雑誌』 124(12) 『法制史研究』 66, 425-426.
- 宮地啓介 (1987) 「アテナイにおける艦隊乗組員の調達－志願者募集制と徴兵制－」『西洋史学報』 13, 1-19.